



THE HIROSAKI UNIVERSITY LIBRARY BULLETIN  
弘前大学附属図書館報 No.29 2009.5

目次

巻頭言 弘前大学附属図書館の60年	1
特集 「津軽領元禄国絵図写」について	4
特集 官立弘前高等学校資料について	6
lead-off 本との出会いを楽しむ〈第3回〉	10
lead-off 図書館に関する話題〈第3回〉	13
弘前大学出版会より新刊紹介	17
本学教員等著作寄贈図書・資料一覧	19

## 弘前大学附属図書館の60年

附属図書館長 長谷川 成一

新入生諸君、入学おめでとう。本年（平成21年〈2009〉）は、弘前大学創立60周年にあたり、諸君はまさに記念すべき年に入学したのである。附属図書館（以下、本館と略記）は、昭和24年（1949）5月、新制弘前大学が開学したのと同時に設置されたので、本館も60周年を迎えたことになる。本館にとっても、記念すべき年である。この記念すべき年の開始に当たって、本年4月15日には、官立弘前高等学校資料のなかに埋もれていた、18歳（数え年）の太宰治（本名 津島修治）の写真を公開したところ、全国的に新聞・テレビなどに取り上げられ、太宰の青春の肖像を所蔵している大学として、本学並びに本館の名前は広く知られることになった。



太宰治の写真をご覧になる  
長女の津島園子さんと長谷川館長



太宰治の写真を公開（記者発表の様子）

本館は、前身校である官立弘前高等学校、青森師範学校、青森青年師範学校、青森医学専門学校、弘前医科大学（いずれの各校も旧制）の蔵書を基礎として出発した。発足時の蔵書数は、果たして何冊であったか。知っている方は、今ではほとんどいないであろう。約 53,000 冊である。現在は、図書 805,792 冊、雑誌 24,761 種、

電子ジャーナル 2,148 タイトルである（平成 21 年 3 月 31 日現在）。創立時の約 15 倍の規模の蔵書数に拡大し、東北 6 県の国立大学では、東北大学、山形大学について、第 3 位の蔵書数である。

施設などに関して言えば、昭和 31 年（1956）4 月 27 日の「東奥日報」記事のヘッドラインには「お粗末な弘大図書館」と見え、蔵書数の少なさは東北地方でもシンガリ（最後尾）をつとめているのに加え、火災が発生すれば、図書が全滅する危険のある分館も存在すると警鐘を鳴らしている。現在では、昭和 45 年（1970）に建設された鉄筋 3 階建ての本館 3,462 m<sup>2</sup>と昭和 59 年に増築した分 2,190 m<sup>2</sup>、その他あわせて延べ 6,102 m<sup>2</sup>。そのほかに医学部分館の改築もあって、施設としては他大学と比較して遜色ない規模に発展した。



旧本館（昭和 39 年頃）

ソフトの面では、平成 5 年（1993）4 月から学生の強い要望に応じて、土曜日の開館時間を延長し、同 8 年 4 月からは東北地方の大学ではじめて日曜開館を実施して、大幅なサービスの向上を図った。ついで昨年（2008）年からは、昼食時の時間帯のレファレンスサービスの実施、本館と分館の間の貸出・返却サービスのシステム化などを実施して、図書館利用の一層の向上を行った。

附属図書館 60 年の歴史を簡単に振り返ってみたが、本館は必ずしも順調な歩みを続けてきたわけではない。さらに現在解決しなくてはならない課題も多い。利用している学生諸君にとっても、決して満足の行くサービスを常時受けていると思えない面も多いことであろう。その足らざる部分を補うべく、昨年度から本館では、ロールプレイングを伴う研修を行って、本



応接に関するロールプレイング研修



諏訪田前学術情報部長の講演会

館職員の応接に関するスキルアップを図った。さらに、大学図書館に長年勤務しベテランのライブラリアンとして全国的に名前を知られていた諏訪田義美・前学術情報部長に、附属図書館員はどうあるべきかと題して講演をしてもらい、館員としての意識向上を図った。ハードの面において飛躍的な躍進を直ちに期待できない現状にあっては、本館として、本年も引き続き職員研修を重ねてソフトの面で

のスキルアップと館員としての意識向上を目指す所存である。その場合、私たちの独りよがり  
に陥らないために、学生諸君並びに教職員の方々から忌憚のないご意見を頂戴できれば幸いで  
ある。

最後に、図書館の存在を哲学的な見地から考察し、17世紀～18世紀にかけて活躍したドイツ  
の哲学者ゴットフリート・ライプニッツ（Gottfried Leibniz 1646-1716）は、「図書館は人間精  
神の宝庫となるべきである」と述べている。本学附属図書館は、弘前大学における知の拠点・  
中枢として、学生・教職員並びに本館職員の方で、ライプニッツの言葉にある人間精神の宝庫  
にするべく努力・精進して行きたいものである。

（はせがわ せいいち）